

中国語における単音節と複音節の副詞について

小 林 立

中国語の現代文は、古文に比較すると文章が長くなる傾向にある。その原因は単語が単音節から複音節に変化していることに求められる。

“いま、《論語》の一文とその現代語訳とを比べてみると、

原 文：季文子三思而後行。子聞之，曰：再斯可矣（公冶長）

現代語訳：季文子（毎件事）考慮多次才去行動。孔子听到了，說：想兩次也就可以了（楊伯峻《論語訳注》による）

〔季文子は（なにごとでも）なん回も考えてから行動する。孔子はこれをきいて、二度考えればそれでいいのだといった〕

このように、現代語の方が字数が多くなっているということは、三→多次、思→考慮、行→行劫、再→再次、斯→也就、可→可以、というように、一音節のものが複音節になっているからである。”①

何故、単音節から複音節化する必要があるのか。中国語は本来、単音節語であり孤立語であるという基本的性格をもっている。十九世紀末以来、中国は近代化のために言語改革の運動を推し進めて来た。それは民衆を教育し、文盲をなくす運動でもある。書面語には文語文と白話文の差があったが、その差を縮めて白話文にしようとする運動が行なわれると共に、白話文と口語との差を接近させようとする運動が一貫して意識的に推進されて来た。難から易へという方向が基本にあり、言語の表現もそれに沿って単音節から複音節化へと変化させ、目で読んで意味が分かるものから耳で聞いて分かる表現への努力工夫がなされている。そのためにも複音節化は聞き手の理解度を高めるであろうし、ラジオ、テレビなどの伝達手段の登場も、中国語の複音節化を促進する原動力となっていると言えるに違いない。

中国語の一つの発展方向が単音節から複音節へという流れであると言えるな

らば、現代中国語の副詞は、どのように複音節化しているだろうか。

単音節の副詞の複音節化の手順には、二つの型があると思われる。

- (1) 異った語素を加える (“A”→“AB”, “BA”)
- (2) 同じ語素を繰り返す (“A”→“AA”)

まず(1)の異った語素を加えた複音節の副詞についてみると、例えば、

本→本来(もともと)，已→已經(すでに)，老→老是(いつも)，終→終于(ついに)
 概→一概(すべて)，毫→絲毫(すこしも)，較→比較(比較的)
 独→獨自(ひとり)，略→略微(わずかに)，暫→暫時(しばらく)，早→早已(とくに)
 独→独独(ただひとつ)，略→略略(いささか)

など②③

次に(2)の同じ語素を繰り返し、複音節化した副詞については、例えば、

白→白白(むだむだ)，単→單單(ただ、だけが)，常→常常(いつも)，独→独独(ただひとつ)，剛→剛剛(ちょうど、したばかり)，
 久→久久(久しく、長い間)，明→明明(明るい、確かに)，早→早早(はやはやと)

など②③

(1)と(2)を比較すると、複音節化の手順が原則的に異っていると云わねばならない。

まず(1)は単音節の副詞“A”に異った語素“B”を加えた場合、“B”は接尾辞か、類義語か、または修飾語もしくは被修飾語として結合して、複音節の副詞を構成すると思われるので、“A”と“B”の関係は複雑である。例えば、

〔接尾辞：～来，～然，～是，～然，～于など〕

本→本来，從→從來(今まで)，素→素来(かねがね)，向→向來(これまで)，
 曾→曾經，已→已經(かつて)，
 倒→倒是(かえって)，凡→凡是(おまじ)，老→老是(いつも)，總→總是(どうしても)，
 果→果然(果して)，忽→忽然(はにかに)，竟→竟然(なんと)，猛→猛烈(急に)，
 過→過于(あまりに)，終→終于

〔類義語〕

重→重新(重ねて)，純→純粹(まじりがない)，反→反例(かえって)，另→另外(べつに)，

略→(わずかに) 略微, 怕→(たふん) 恐怕, 親→(みづから) 親自, 特→(わざわざ) 特別,
永→(いつまでも) 永遠,

〔修飾語〕

概→(すべて) 一概, 共→(みんな) 一共, 連→(続けさまに) 一連, 齊→(同時に) 一齊,

〔被修飾語〕

頓→(急に) 頓時, 暫→(しばらく) 暫時,

次に、(2)は同じ語素の繰り返しであるので、その同義性は完全に等しいと言えるに違いないが、繰り返すことにより、意味が強調されることも間違いないのではないか。しかも複音節化し、意味が強調されることにより、一般にその意味が狭くなるという変化が生まれている。従って、複音節化した副詞と元の単音節の副詞との両者の共存が必要とされることにもなるのである。つまり単音節の副詞は、複音節化した副詞が欠落させている意味を表現する役割を依然に持っていると言える。例えば、

「白」と「白白」について見ると、副詞「白」には“むだに”と“ただで”の意味があるが、「白白」には“むだに”という意味しかなく、「白」のもつ“ただで”という意味はもっていない。

「常」と「常常」について見ると、「常」には“いつも”と“久しく”という意味があるが、「常常」には“いつも”の意味しかない。

「独」には“ひとりで”と“…だけ”という意味があるが、「独独」は“…だけ”という意味しかもたない。②

以上の例とは逆に、複音節化した副詞の意味が広がる場合もある。

「偏」と「偏偏」について見ると、「偏」には“却って”と“逆に”という意味があるが、「偏偏」には“却って”と“逆に”の外に、“…だけ”という意味が加わる。従って「偏」よりも「偏偏」の方が意味の数は増えている。②

同じ語素の繰り返しにより複音節化した副詞は、意味に狭い広いの変化が生れる場合がみられる以外に、一般的にいって、単音節の副詞よりは、意味が強調されている。例えば、

「剛」は“ちょうど”“たった今”という意味であるが、「剛剛」は“たった今”という意味で用いられる場合、その時間的間隔がより短いことを強調する意味が加わる。

「万」には“極めて”“絶対に”という強調の語気があるが、「万万」はその程度が更に強烈であって、“いかなることがあっても”といった強い意味をもっている。

「足」には“十分に”という意味があるが、「足足」はそれよりもっと強調した意味をもっている。②

以上の事例から単音節から複音節への趨勢が一般的であるとはいえ、同じ語素の繰り返しによる複音節化の場合に見られたように、表現上の必要性から単音節の副詞も依然、その存在価値をもっている。

しかも複音節化の趨勢の中であって、一方では単音節の形で用いられ、複音節化しない副詞が存在するという事態が見うけられる。例えば、

「不」, 「才」, 「就」, 「還」, 「更」, 「很」, 「也」, 「又」, 「再」, 「只」などの副詞は、むしろ単音節の形で常用されるのが普通である。常用の単音節の副詞ほど、複音節化しない傾向は、常用の動詞の多くが単音節語であることと類似の現象を呈していると考えてよいのではないか。〔吃(たべる) 喝(のむ) 説(はなす) 听(きく) 看(みる) 写(かく) 等〕そこには中国語の単音節語という基本的性格が厳然として貫徹していることを窺わせるものがある。

複音節化の手順には二つの型があって、両者は異質の型であるが、中にはその両者をもつタイプの副詞がみられる。その意味は少しちがうようである。たとえば「略」には「略徴」と「略略」の二つがあり、「独」にも「独自」と「独独」の二つがある。両者は互用することはないと言ってよいのだろう。これに対して、

「已」には「已經」「早已」などしかなく、「巳巳」という型がないのはなぜであろうか。

(1)の異った語素との組み合わせの場合にも、互いに結合する語素は一定の傾

向があって、むやみに複音節化するわけではないように思われる。(2)の繰り返しによる場合、「白」は「白白」という型は何故そういう手順でしか複音節化しないのか。それは何故なのかという疑問が生れるが、繰り返し型をとる副詞の多くは、来来、形容詞から派生して来た副詞であるという傾向がみられるのではないだろうか。

従って、複音節化に原則の異った二つの手順があることは、副詞と呼ばれる品詞の実体が多源的であることの反映であると言えるかもしれない。

〔要約〕

現代文は古文に比べると長くなる傾向にある。その原因は単語が単音節から複音節に変っている所にある。伝達手段としての言語表現は、分かり易く、より正確に伝わる事が望まれるが、中国語の基本的性格である単音節語を活かしつつ、出来る限り複音節化することは一つの有効な手段であろう。

中国語の副詞の複音節化について見ると、元の副詞に異った語素を加える場合と同じ語素を加える場合とがある。いずれの場合も、単音節から複音節に変化するにつれて、意味の上でも何らかの変化が生じて不思議はない。殊に同じ語素を繰り返す場合、強調の語気が強まると共に意味にも狭い広いの差異が発生しており、単音節の副詞の存在が必要である。

副詞の複音節化の手段として、異った語素を加えるか、それとも同じ語素を加えるかとは型が全く異質であると言わねばならないが、両者は共に機能している。そのことは、元の単音節の副詞の来源の差を示唆しているのかもしれない。本来の虚詞としての副詞であるか、本来は実詞である形容詞から派生して副詞になったものであるかといった来源の多様性の反映であると考えべきではないかと思われる。

《引用参考文献》

- ①香坂順一『中国語学の基礎知識』38～39頁、光生館
- ②齊沪揚「談単音節副詞的重疊」(「中国語文」一九八七年第四期所載)
- ③劉淑娥・趙靜貞「談単音詞与双音詞組成的同義副詞」(「語言教学与研究」一九八七年第三期所載)